

“安心・快適”をモノサシに。 住みよい住環境を目指して。

川南のパワー

FRONTIER SPIRIT



平成十一年に行った「町民意識調査」で、二十歳以上の男女九百人に、川南町の住み心地を尋ねたところ「非常に住みやすい」「まあ住みやすい」が、合わせて八二・一％だった。大半の人が川南の暮らしに「満足」している様子がうかがえる。

そんな住環境の快適さを計るモノサシの一つが、自分が行きたいところへのアクセスの利便性だろう。道路は町民の生活や経済活動を支える重要なインフラ。舗装率は平成十二年で九一・九％に達している。平成十四年九月には待望の東九州自動車道（都農―高鍋間）

の工事も着工した。完成すれば、川南町は都農インターと高鍋インターのどちらからも利用が可能になる。鹿児島、福岡がグッと近くなる格好だ。

需要に応じた環境整備という意味では、地域に根ざした魅力ある住まいづくりも必要。公営住宅は現在、十八カ所に五百十一戸（平成十四年十月）建てられている。しかし老朽化した住宅は建て替えも必要。平成十五年から十八年に、ひばりが丘住宅を整備していく予定で、質的水準を確保し、今後も適正な供給をはかっていく。

だれもが快適に暮らしていく上で、下水道の整備も重要な課題のひとつ。家庭から出る生

活雑排水が水路や河川を汚し、害虫等の発生を招くなど、公共用水域の水質改善が求められている。そんなところから、平成二十六年度の完成を目標に、町の人口の約三〇％を占める都市計画用途地域二百六十ヘクタールとこれに隣接した三十五ヘクタールを下水道全体整備区域とし、なかでも、特に住宅が密集する百ヘクタールほどを第一期の事業区域として整備を進めている。順調にいくれば、平成十六年には供用が開始できる。

目下、川南町から出るゴミは一日約九トン。生活雑排水と並び家庭から出るゴミも快適な環境を維持していく上で大きな課題だ。基本的にはゴミの減量化と再資源化、リサイクル

化を進め、清潔で住みよい町を目指す。現在、平成十七年稼働予定で、「西都児湯クリーンセンター」（仮称）の建設が進められている。完成すれば、リサイクルプラザ、廃棄物運搬中継施設、一般廃棄物最終処分場を備え、しかも子供から大人までゴミ問題を肌で感じてもらえるような配慮も盛り込んだ、広域ゴミ処理施設が力を発揮していくことになる。

暮らしの「安全・安心」という観点からは、町の「消防団」の働きによるところが大きい。現在、十四部、二百四十三名で構成されている。春は火災予防運動の一貫で町内を消防自動車で回りながら広報活動を行う。秋は火災防衛訓練を行う。通浜地区は住居が密集しているため自主防災組織が作られ

ており、夏に行う津波避難訓練の際に、消火栓や消火器の使い方など初期消化の指導も行っている。毎年、夏に行われる「消防操法大会」では、県大会で二年続けて優勝する部が出るなど、消防団員の腕も折り紙つき。平成十三年度は五回の出動件数があった。今後も、町民の生



命と財産を守り、火災発生による被害を最小限に食い止めるための出動と訓練、広報活動などを行っていく。

【三】 ルーツ探訪「トロントロン」

何ともかわいらしい「トロントロン」の響き。とても地名とは思えない。西南の役で大敗した西郷隆盛の軍が松林の中で休憩し、その時わき水の音が「タラン、タラン」と聞こえ、兵士たちが癒されたこと

からいつしか名づけられた、という説もあれば、江戸時代の参勤交代で立ち寄る水飲み場の音が「トロントロン」とか「トロント」と響き、由来となったなど説はいろいろ。近くの川南湿原にはいまも湧き

水が出、湿性植物がかわいい花を咲かせる。それにして、わき水を「コンコン」とか「ゴボゴボ」なら話は分かりやすいが、「トロントロン」とは、やっぱり川南らしく「文学的」センスが溢れている。